

---

# 恋姫無双 天に轟け無双の剣客

ROM専

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫無双 天に轟け無双の剣客

### 【Nコード】

N0995BA

### 【作者名】

ROM専

### 【あらすじ】

ある日のこと。道場から自宅に帰った主人公は、サンタクロースを自称する爺と出会う。「少年少女に夢を届けに来た」というサンタクロースを警察に突き出そうとする主人公だったが、サンタクロースは必死に時間稼ぎをして…

## 第一話

「メリークリスマスじゃ、少年」

戯言を言う爺がいた。

自宅に帰ってきてきて早々に不審者に会うなんて、えーっと、こういうときはどうするのだ？

一先ずはこの不審者を警察に通報すればいいか。

サンタの格好をしてはいるがどう考えても泥棒だろうし、何より不法侵入だからな。

「ま、待て。ワシは怪しい奴ではない。少年も知っているじゃろう？クリスマスの時期になると少年少女に夢を届けに来る…そう、ワシがサンタクロースじゃ」

どこをどう見たら少年に見えるのだろうか。

俺は既に25歳であり、間違えても少年には見えぬはずなのだが。

「ああ、大丈夫だ。俺は十分理解している。サンタの格好をした泥棒が無駄な言い訳をしているのだろう？そして俺は既に25歳になる。少年なんていう年齢ではない」

さて、早速だが通報するか。

時期的に、正月は刑務所で迎えることが出来るだろう。ただで餅が

食えるなんて幸せな・・・

待てよ。折角の機会だ、この泥棒を痛い目に合わせるのも悪くないな。

幸い道場帰りで竹刀の持ち合わせがある。俺の腕で素人相手にどれほど通用するか…試して見るか。

「待てと言っているじゃろう。ワシは真正正銘のサンタクロースなのじゃ。ほら、少年。欲しいものがあれば何でも言うがいい。何でもくれてやるぞ」

「ふん、通報されるまでの時間稼ぎという奴か？だが、生憎欲しいものは何も無い。強いて言えば、お前をボコボコにしたいくらいだな」

「む、その願いは叶えてやれんがワシではない誰かをボコボコにするという願いは叶えてやれるぞ。少年が力を抑えることなく十二分に発揮できる最高の場所を用意してやろう。これを見るがよい」

自称サンタクロースの手から妙な立体映像が浮かび上がる。

まず目に入ったのは漢と描かれた旗。

そしてそれを取り巻く剣兵、槍兵、弓兵や騎兵。

察するに三国志の時代なのだろうが、これが一体どうしたというのだ。

「見ての通り三国志の世界じゃ。少年の知る三国志とは些か異なる

点もあるが…もし、少年が三国志の世界に行きたいといっているのであれば、その願い叶えてやることができるぞ?」

「映画の舞台へ招待されても仕方が無い。生憎と演劇の類には興味がなくてね」

立体映像には多少惹かれたが、所詮は市販品だろう。

欲しければ買えば済む話、奴との交渉に応じる必要はない。

「映画などではなく現実なのじゃが…信じてくれんかの?」

「信じるも何も三国志を模した立体映像があるのは事実だ、それは認めよう。だが、これが映画ではないと言つのはどういう意味だ?」

「それはのう、こういうことじゃ」

立体映像が部屋中に広がり、埋め尽くされる。

先ほどまで家具や照明があったがそれらは全て消え失せ、フローリングの床は砂質の荒野と化した。

ふむ、最近の科学はここまで進歩したのか。

「どうじゃ?ワシの言ったとおり、紛うこと無き現実じゃろう。まだ疑うというのであれば足元の砂を蹴ってみるがよい。ここは既に三国志の世界じゃ、砂を蹴れば塵舞うだけ。現実だからのう」

言われたとおりに砂を蹴り飛ばしてみる。

なるほど、確かに砂は舞う。感触もフローリングの床などではなく、砂質の地盤といったところだ。

ここが三国志の世界であるかどうかは兎も角、この場は立体映像ではないのだろう。

「で、これはどういった仕掛けがあるのだ？人の家を砂塗れの荒野にして…通報されるだけで済むと思うなよ」

「少年の家は無事じゃ。決して砂塗れになってなどはおらんよ。ここは少年の家ではなく、先ほど見せた三国志の世界なのだから」  
今度は俺の家が立体映像で映される。

そこには先ほどまで持っていた竹刀も確かに転がっているし、奴の言うことは事実であるように思われる。

どういう理屈が分からんが、少なくともここは俺の家ではないようだな。

「納得してもらえたかの。それでじゃ、事後承諾で悪いのじゃが少年は既に三国志の世界の住人となった。故にもう戻ることは出来んのじゃ。すまんのう」

「は？！それはどういうことだ。戻ることが出来ぬとは、本当にここが三国志の世界だとも言うのか？」

俺の家ではないことは確かだろうが、三国志の世界だと言われて易々信じる事が出来るはずがない。

俺が何らかの方法でどこかの荒野に移した？

馬鹿な、そんな話があるか。仮にそんな話があるのであれば、車や電車は使われないのだから。

だがしかし、ならば今ここに確かにある荒野は一体…

「少年も疑り深いのか。戻れぬことは事実じゃ。一度世界を渡ってしまえば戻ることは出来ぬ。そしてここは三国志の世界じゃ。少年の生を賭けてまでしのぎを削る、そんな世界を望んでおったのじゃろう？」

望んでいた…ああ、望んでいたのだろう。

俺の流派は古くから伝わる佐々木小次郎が創始した剣術の一派、巖流。

宮本武蔵の二天一流の影に隠れ、細々と俺の代まで受け継がれてきた。

流派の名、優劣。全てにおいて巖流は劣っていると、そう評価されている。

酷い話だ。確かに俺は巖流の担い手だが、俺自身が二天一流に敗れたわけではない。

過去に巖流の担い手が敗れたのは事実だが、だからといって今も尚劣っているという証明にはならん。

だからこそ、俺は巖流こそが天下一の剣術であると、そう示したい

のだが…

生憎、現代では真剣を使ってしのぎを削る試合などありはしない。

道場剣法が関の山。

だから奴の言うように、俺は生を賭けてしのぎを削る、そんな世界を望んでいる。

どうやって知りえたのかはわからんが、良くわかっているな。

「稀におるのじゃ、そういう者が。然るべき時代にさえ生まれていれば問題ないのじゃが、場違いな世界に生まれてはどうしようもあるまい。だからこそ、ワシが少年の望む世界へと送ってやるうというのじゃ」

「ワシの都合上、三国志という舞台になってしまったが不満はあるまい。他流派と競い、天下一を決めるのは少年の願いに適っているじゃが、巖流を響かせることは剣術の祖を築くこと。三国志の時代に巖流を剣術の源流として示すのも、それはそれで乙なものじゃろう」

巖流は過去に実戦で用いられたことがある。

だが、俺自身は巖流を実戦で用いたことはなく、そこは正に道場剣法と変わらぬと言ってもいいだろう。

人を斬ったことの無い俺が巖流を実戦剣法というには些か無理があるからな。

故に、俺が巖流を実戦剣法として確立する。

そういった意味では、三国志で巖流を響かせるという話は悪くない。俺自身がどこまで通用するのも知りたい話ではある。

天下一の称号は…まあ、弟子や息子にでも取らせればいいだろう。なんだ。結局のところ、巖流がどうか言ってはいるが、俺は学んだ力を振り回したいだけなのか。

25にもなって、巖流を、人斬りの術を実戦で使いたいなど…なるほど、確かに場違いな世界に生まれているな。

「爺、話は分かった。戻れぬという話はいい。ここが三国志という話もいい。だが、俺が俺の願いを叶えるには得物が必要なのだが」「おお、やっと納得してくれたか。よいよい、得物はワシがくれてやる。ふむ…これでどうじゃ？折れもせず、刃こぼれもせん刀。切れ味は普通じゃが、壊れぬ刀というものは惹かれるじゃろう？」

受け取った刀は俺の背よりは一寸ほど小さい、五寸前後ある長刀。

試しに抜いて振るってみたが、存外軽く見た目ほどの重さを感じさせない。

これで折れぬ、こぼれぬというのであれば最高の刀だろう。

巖流は元々長刀を用いる、長さも適当であり文句はない。

「気に入ってくれたようじゃな。他に何か欲しいものはあるかの？  
叶えられるものであれば叶えてやるう」

「金と食料と衣服だ。金は暫く大陸を旅することが出来る程度にあればいい。食料は数日分もあれば問題ない。衣服は三国志の世界にあったものを頼む。あとは…」

「すまんのう、一度に言われても覚えられぬのじゃ。ほれ、金と食料と衣類じゃ」

金は袋に入って渡されたが金額がいまいちわからん。使って慣れるしかないな。

食料は干し芋、干し肉、味噌に塩。後は竹で出来た水筒が2つ。

三国志で味噌が手に入るとは今後恐らくなかるうから大切にしたい。

衣類は時代劇で町人が着ていそうなものより質の悪い麻で出来たもの。

最初はこの程度で十分か。絹の衣類が欲しければ成り上がって手に入れればいい。

幸い、三国志は武辺者でも将足り得る。

俺の場合は刀一本で成り上がる事になるが、不可能ではあるまい。

「あとはこの世界のことだ。俺の知る三国志とは些か異なる点があるといったが一体何が異なるのだ？」

「異なる点のう。強いて言うなら、三国志に登場する名将が女であること。姓、名、字以外にも真名という名を持つこと。少年の言葉は通じるが文字は読めぬこと。こんなもんかの」

言葉は通じるが文字は読めん。これは辛い案件ではないか。

いや、この時代の識字率を考えれば十分妥当か。

田舎から来た武辺者として振舞うには丁度いい。

将は将として憧れるものもあるが、俺は一介の剣豪であるのが相應しいだろう。

武より他に誇れるものはないのだ。そんなものが将を務めたとしても兵が散るだけで意味を成さない。

「追加じゃが、真名は許された場合を除いては呼んではならん。無礼千万というものじゃ、覚えておくときよい」

「初対面で下の名を呼びつけるようなものか。最後に、三国志と言っても時期は色々ある。黄巾の乱もあれば官渡の戦いもあるう。今はいつになるのだ？」

「今正に黄巾が立つといったところじゃの。立身出世を望むなら絶好の機会であると、ワシは思うぞ」

黄巾の乱が起きる前か。

ならば向かう先は豊富にあるだろう。

劉備、曹操、孫権、官軍に向かうのもあり…いや、官軍は無理か。

見ず知らずの力量も分からん流民のような者を兵として扱わずが  
無い。

賊と見られて斬られるのがオチ。

妥当なところは劉備が率いるだろう義勇軍に混ざるところか。

もしくは個人で細々と乱を鎮めるとか、そんなところだな。

腕試しとしては軍に加わるよりも、小規模な賊を潰すのが一番かも  
しれん。

独りであるなら死んだところで誰にも迷惑をかけん。

それに俺自身の力量を把握するのにも適している。

「もういいかのう？これ以上質問がなければワシは去るが」

「無いな。爺には世話になった。勝手にこの世界に連れてこられた  
ときはどうしようかと思っただが、考えてみれば悪くない話。ほとん  
どが貰い物で、縋れるものは己の腕だけというのも理想的だ。出鱈  
目な話ばかりだったが感謝している」

「ふおつふお。喜んでもらえたのなら冥利に尽きる。少年、いや佐  
々木小次郎。剣客として大陸に名を馳せること、期待しておるぞ」

自称サンタクロースの爺はまるで夢だったと言わんばかりに消えて

しまった。

ここだけを見れば蜃気楼であったり、目の錯覚だったりしたのかも  
しれない。

だが、現実には長刀があり、自宅ではなく荒野が広がるばかり。夢  
ではないことはそれだけで証明できる。

三国志の世界か。黄巾の乱に始まり、はたしていつまで生きること  
ができるのやら。

それにしても、あの爺は俺の名前を知っていたのか。

佐々氏小次郎。古臭い仕来りだとは思うが、巖流の後継者は全て同  
じ名を名乗る。

それを知っているのだから、俺についても十分調べた上での犯行だ  
っただらう。

「さて、まずはどこに向かうか」

そう呟いたところで失態に気付く。

今、俺がどこにいるのかということ俺は知らない。

これは失態だったな。大陸は広く、徒歩では西へ東と易々と移動す  
ることも出来ない。

馬も貰っておけばよかった。

やれやれ、出だし早々後悔の連続か。先が思いやられる。

まずは街道に沿って村落を探し街を目指す。これが妥当な判断というものだな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0995ba/>

---

恋姫無双 天に轟け無双の剣客

2012年1月2日07時46分発行